

【Session 3-2】

神霊の道であるシャマンの身体

クネヒト・ペトロ

本論文は中国の内蒙古自治区呼倫貝爾（フルンブイル）市の地域で行った現地調査で蒐集した資料の一部を元としている。後に展開される議論を適切に評価してもらうために、差し当たって調査の状況を簡潔に述べることにする。調査地に赴いて、長期滞在の間シャマンの活動と彼らの生活環境を観察するのは理想的だが、これは様々な事情で不可能であった。代わりに2000年より約10年間毎年の夏に平均して2週間現地に滞在して、モンゴル、エヴェンキとダフルのシャマンたちを訪ね、聞き取りと儀礼観察による調査を行った。この間、10人くらいのシャマンに出会ったが、うちの3~4人と親しく付き合える機会を得た（クネヒト2004）。

この付き合いを可能にしたのは優秀なモンゴル人の通訳者である。中国語を初め、現地の諸言語に通じない筆者にとってどうしても通訳者が必要であった。彼はモンゴル人なので、モンゴル語は勿論、モンゴル人の慣習にも通じているので、現地の人々とよい信頼関係を築くことができた。その上、彼自身もシャマンたちに関心を持ち合わせていた。

シャマンたちは、僅かな例外を除いて、我々を快く受け入れ、多くの儀礼を観察することを許した。最近彼らの数が次第に増えつつあるのみならず、諸活動が比較的公に行われている。それでも色々な制限が働いて、不安の影を落していることは見逃せない事実である。「シャマンのない時代」と言ってもいような状況を残した文化大革命は現在まで尾を引いている（クネヒト2010b）。その結果、シャマンたちは注意深く活動している。この事情が本論文の背景を成しているのを念頭に置かなければならない。

シャマンの身体を「神霊の道」と見做そうとする場合に、この概念は、シャマンになりシャマンとして活動する人物の体験において三つの連続的段階を見分けることができる。まず、道になる前兆が現れる。次にそれを認めた人が現役のシャマンを師匠に選び成巫儀礼を受ける。最後に新しいシャマンとして活動する。これが三段階である。本論文で、この諸段階に沿って論を進めるとともに、必要に応じて「道」を物質的に示す手段的道具などにも言及する。

シャマン探しを始めようとした時に、海拉爾市（当時）政府の宗教局長にあって、シャマンの有無についての情報を求めた。1人を除いて、現在シャマンは存在しないが、この人は力強いシャマンだという返事を得た。早速この人を訪ねることにした。シャマン業を引退したばかりの高齢の男の人であった。彼は幼い時からシャマンとその踊りなどに強い関心を持ったので、自分もシャマンになりたいと願って、シャマンであった叔父についてシャマンに必要なことを教わった。シャマンの魅力に惹かれた彼は、シャマンの使命を仄めかす原因不明の病の体験は必要でないと強調した。しかし、後に出会ったシャマンたちはこの主張を強く批判し、否定した。何故なら彼らに言わせると、このような病はシャマンになるのに欠かせない条件だからである。では、この病は雇った人にとって何を意味しているかをH（男）シャマンの体験譚を基にして述べよう。

H氏はバルゴ・モンゴルの貧しい家庭に生まれ、幼い時親に死に別れた。彼は、12才の時、ある日羊

を放牧した際、目の前が突然真っ暗になって倒れた。文化大革命最中の出来事だった。やがて北京まで行って、医者に診てもらい、その他にも数人の医者たちにかかったが、病は少しも治らなかつた。この状態は12年間も続いていた。病状が余りにも悪化して苦しいので、1990年に町の病院に入院したが、死にたいと思ったことさえある。哀れと思った姉が彼を Hailar へ連れて行き、漢人の占い師に診てもらった。この人の家に暫くの間泊まり、治療を受けた結果、幾らか快復した。けれども、占い師は「あなたの体にオンゴンが入ろうとしているので病気になっている。あなたは福ある人だ。皆を助けることができる人だ」と告げ、郷里へ帰って、神を拝むように勧めた (Erdemtu 2004, 81)。さらに、どのようにしてシャマンになれるかをモンゴルの先生に教えてもらいなさいとも言った。勧められたようにした彼はかつてシャマンであった人を見つけたが、この人は文化大革命中にシャマンの道具を失って、もう活動していなかった。けれども「私には何にもできない。あなたは自分の力で頑張って、シャマンになるしかない」と指示した。

その頃、H氏の7才であった娘が突然家族の人々の前で踊り出し、皆を驚かせた。その訳を伺おうとして、漢人の占い師を訪ねたところ、「あなたはオンゴンを大事にしないので、オンゴンが娘の体に入っている」と教えられた。この占い師は暫くの間H氏を指導したが、オンゴンが彼に入るようにすることに成功しなかつた。その頃、本人も家族全員も相次いで病気になってしまった。困っていたH氏は今度エウエンキの bariyaqi という治病師に頼るようになった。この人もシャマンではないが、「あなたはシャマンにならないと駄目だ」と言って、シャマンのことを覚えている老人の知識を求め、彼らとともに定期的に神の祭をするように指示した。H氏は余り真面目ではなかつたが、2~3年続いて助言に従ったあげく、やっとシャマンになるのを承諾した。それで1994年の旧暦9月に祭をした時にオンゴンが初めてH氏に入った。その結果、彼の病が治った。それでも、彼の悩みはまだ終わらなかつた。シャマンの唄や踊り方などを知らなかつたので強い不安感に陥った。そのことをオンゴンに対して訴えたら、オンゴンは「あなたではなく、私はあなたの体と口を使って、あなたの代わりに必要なことをやる」と教えてくれた (Erdemtu 2004, 83)。

やや長い話だが、この中にH氏がシャマンになる過程の幾つの特徴が現れている。文化大革命とその後の厳しい社会事情によって、彼がシャマンになる過程が完了するまでに数十年も掛かった。どのシャマンの候補者もH氏と同じ位の長い準備過程を通過しなければならないわけではない。しかし、この過程の始まりは病因不明で、現行の医学的治療に負えない病であることは他のシャマンたちも一般に認めている。しかも、これがシャマンになり、その使命が授けられようとする前兆であるとも理解している。シャマン候補者にとって、不安感に満ちて、使命の承諾と拒否の葛藤が繰り返される苦しい過程である。その目的は、H氏の訴えに対するオンゴンの答えで明らかになる。「あなたではなく、私があなたの体と口を使って、あなたの代わりに必要なことをやる。」そのためにオンゴンはシャマンの身体に憑依し、それを祈願者に対して話したり、働きかけたりするための道に使う。従って、この苦しい過程の体験を通して、シャマン候補者の身体はオンゴンがやがて祈願者に接するために利用できる道として作り上げられ用意されている。

以上述べたHシャマンが体験した大変長い準備過程をどのシャマン候補者も同様に体験しなければならない訳ではない。というのは、この過程に懸かる時間の長さが問題なのではなく、病因不明で、医者が治せない特殊の病が切っ掛けで苦しい体験であることはその特徴である。これで、オンゴンは何時でも出現できるように特定の人の身体を自分の道に拵えておく。Hシャマンの場合には彼が置かれていた特殊な歴史的事情との関係で、現役のシャマンに弟子入りして、その元でシャマンに必要な知識や技能などを身に付ける機会がなかつた。本人が正式にシャマンになるまでにモンゴルの長老たちのアドバイスを求めながら自分の力で頑張るしかないと言われた通り、自力でシャマンになった。その証拠は

オンゴンによる最初の憑依の体験であった。しかし、当時の厳しい状況がある程度和らいできた現在では、所謂「巫病」が相変わらずシャマンに成る使命の前兆であるにも関わらず、病のこのような性質を認めた上で、それを体験している人が現役のシャマンを師匠に選んで、弟子入りすることが常例である。シャマンと生活を分かち合って、儀礼の時にシャマンを手伝うなどの方法で以ってシャマンに必要とされている技能を見習う。これで自分を、精神と身体を含めて、オンゴンの道になるために準備しているのである。見習いのこの期間が長いか短いかということは候補者の個人的事情によるが、1年ほど懸かるのが平均だとされている。この期間中にはオンゴンが見習いシャマンに憑依しないはずである。しかし、シャマンの弟子にオンゴンが入ろうとするケースもある。それが起こると歓迎されず、逆に厄介な迷惑と見做される。そうは言っても、これはオンゴンが本人または誰かの身体を自らの道にしようとしている印である。

H シャマンの幼い娘にオンゴンが憑いた例では、オンゴンは彼女を使っても、本当は彼女の父親であるH氏にはいろいろとしていたが、H氏がオンゴンが言うことを何時までも聞いてくれないということに訴えているのである。つまり、オンゴンは自らの意図を強く表すためにH氏に近い人である娘の踊る身体を利用した。シャマンを手伝っている弟子たちなどにも同じようなハプニング的な出来事が起こり得る。H シャマンが行ったあるオボ（敖包）の祭の最後に起こったことだが、その時、儀礼に参加した独りの女性弟子がオンゴンに憑かれてしまった。儀礼がおわって、H シャマンは自分のオンゴンを送り返した後も、彼女に憑いていた霊がなかなか離れなかったのでH シャマンは明らかに大いに困り、様々な方法で彼女を解放してあげようとして、やっとのところで霊を返すのに成功した。

この弟子に起こったことに似ているような出来事は、今年の夏S シャマンが自分の昇格を目的にした盛大な儀礼の最中にB という女性に起こった。B 女性がもう10年ほど前にシャマンになるはずだったが、親の強い反対のためにオンゴンにシャマンにならないことを許してくれるように願って、シャマンになる儀礼の代わりにbariyaqi という治療師になるための儀礼を上げてもらった。彼女は昇格したシャマンをよく手伝って、今回も飾り物などを作ったりして手を貸してくれた。昇格儀礼の最後の日だったが、彼女は見物した一般の人々の群集に交じって、シャマンの踊りを観察していた。彼女が手を合わせて、筆者のすぐ近くに立っていた。何かの予感があって、筆者が彼女を見たら、手が震えていた。震えが益々激しくなった途端に彼女は倒れ、叫び声を上げた。この状態に気づいて、シャマンの傍にいた手伝いの女性が駆けつけてきて、倒れたB氏を持ち上げて、椅子に腰かけさせた。そして、B氏の腹のところに帯をまわして、硬く締めた。その後、B氏の胸と首などに白酒を吹きかけた。その間、B氏は緊張に歪められた顔をして泣いたりしたが、助けてくれた人の手で次第に緊張が解け、B氏の顔に微笑みが浮かんできた。手伝いの女性の話によると、B氏がシャマンになるはずなのでオンゴンが彼女の身体に入ろうとしたそうである。

H シャマンの娘と彼の女性弟子、そして更にB氏の経験には共通点がある。一つは、いずれの場合にもオンゴンという霊が相手にした人の身体に入って、それをそれぞれ別な形ではあるが利用した。憑依の形がそれぞれ違っていると看做しても、オンゴンが相手にしようとした人本人の身体を（H シャマンの弟子とB女性の場合）襲うか、それとも相手と別な人の身体を（娘の代わりにH氏のそれ）使おうとすることによって自らの意志を伝えようとした。今一つは、いずれの場合にも、オンゴンは言葉でその意志を表さず、憑依状態を見た人がその意味を解釈してオンゴンの意図が憑依状態の原因だということを見事に明らかにした。つまり、正式にシャマンになっていない人にオンゴンは憑依し、その身体を操作することがあったとしても、それは突然の出来事であり、オンゴンは無言のまま憑依する。というのは、ここでオンゴンは人の身体を自分を表す道に使っているが、この道を最後まで、すなわち言葉を発するほどまでには使わない。この最後の段階はシャマン候補者がシャマンになる成巫儀礼の場で初めて実現する。

師匠のシャマンが自分の弟子のために成巫儀礼を指揮するのは理想で、常例であるが、候補者を育てた師匠はこの大切な儀礼を、より強いと評価されているシャマンに依頼して、執行してもらうこともある。一言で「成巫儀礼」と言っても、内蒙古で数回観察した成巫儀礼にはかなりのヴァリエーションが見受けられた。それは、幾つかの異なった原因によると考えられる。一つは、現在中国の政治事情で打ち切られているシャマンの伝統による。H シャマンの例が示しているように、彼には伝統によってこの大事な儀礼を行ってくれる師匠のシャマンがいなかった。しかし、現役のシャマンたちの内に彼の弟子で、彼に成巫儀礼をしてもらった人が何人かいる。そのために、彼が始めた儀礼の行い方はある程度現在のシャマンたちに応用されている。ある程度というのは、この方法は必ず守らなければならない方法ではないからである。儀礼を実際にどのように行うかは儀礼を指揮するシャマンの判断と思考によるところが少なくない。従って、1人のシャマンが何回も成巫儀礼を司るとしても、儀礼を受ける相手の事情を考慮したり、儀礼自体のより印象的な形を創造したりする。

成巫儀礼の形は如何なるものであっても、目的は何時も同じである。その目的はシャマン候補者のオンゴンが候補者の身体に入り、祈願者に対して告げを発するように招くことである。成巫儀礼が具体的にどのような儀礼であるかを示すために、2002年の夏にBというブリヤト・モンゴルの中年男性のために執行された儀礼のハイライトを紹介する。彼は草原の中に出て来た村で煉瓦造りの家屋を持って、住んでいた。儀礼のために屋敷地の南側で、屋敷地の境の外でありながら境に隣接するように新しいゲル(包)が建てられた。さらにまた、このゲルを中心に、儀礼で重要な役割を果たすべき木々が東西の両側に並ぶ形で地面に差し込まれた。このゲルと木々は儀礼のクライマックスで重大な役割を果たすので、まずこれらの物について述べよう。

成巫儀礼が行われる祭場は2カ所に分かれていた。1カ所は、シャマン候補者のオンゴンたちが祀られている祭壇が並んでいる家屋内の一室であり、もう1カ所はゲルを中心とする屋外の場所である。夕方、犠牲にされた羊の煮えた肉がオンゴンたちの祭壇の前に揃えられ、供えられた時に、儀礼の第1部が始まった。その際、指揮するシャマンにオンゴンが憑依し、話してから、相次いで付き添いのシャマンたちにも同じように憑依した。夜遅くこの第1部が終了した頃、儀礼の本番は翌朝の日の出頃に始まるというオンゴンが指揮者に伝えた知らせが出た。

本番の会場はゲルが立っている場所である。ゲルとそれに関連して並んで立てられた木々は共に一つの複合体を成している。ゲルの真ん中に、葉がついている梢を残した白樺の木がゲルの天上の穴を貫いて立っている。この木の幹に、人の胸の高さ位に、小麦粉と羊の毛で拵えた巣が結び付けられている。ゲルの外で、西の方角に、2本の白樺の木が立てられた。1本はゲルのすぐ傍にある「父の木」と呼ばれ、そこから20~30メートル離れたところに「母の木」が立っていた。これらの木にも葉がついた梢が残っていた。「母の木」に結び付けられて、牛の生の皮を切って作られた綱が「父の木」の梢を通して、ゲルの中の木の巣まで張られ、付けられた。父と母の木の間に張られた綱に、同じく皮で作られた鐙(あぶみ)のような物が掛け吊るされた。式を担当したシャマンが言うには、儀礼の時に、この綱を辿って、オンゴンがやって来るので、これを「オンゴンの道」と称する。ゲルの東側では柳の九つの束が狭い間隔で並んで立てられた。これを辿って、シャマンを助けてくれるとされている天の9人の童子が会場へ来るという話があるが、B氏の儀礼では、これらの童子は登場しなかったようである。

東の空に太陽の最初の光が現れた時に儀礼の本番が始まった。オンゴンの祭壇が置かれている部屋で短い儀礼を済ませた後、指揮するシャマンと参列者一同が外のゲルの方へ移動した。指揮者のシャマンとシャマン候補者を初め、同行のシャマンたちがゲルに入ったが、一般の参列者は外で待っていた。指揮者のシャマンが太鼓を鳴らしているうちに、候補者は数回ゲルの中心にある木を右回りで回って、突然外へ飛び出した。そこで、弓矢を手渡してもらって、四方に向かって1本づつの矢を放った後、父の

木の元で彼を待ち受けた男たちに持ち上げられて、綱からぶら下がっている籠に、馬に乗るのと同じ様に足を入れた。この姿勢で彼は父の木と母の木の距離を1回往復した。父の木へ戻って来てすぐ地面へおろされたところで倒れて、地面の上で転がった。その時、彼の補佐役を受け持っていた息子に持ち上げられ、椅子に座わせられて、馬の頭が彫られている2本の棒を渡してもらった。そして、各手で1本ずつの棒を握り、それを左右に動かし始めるとすぐオンゴンは彼の口を通して、話し出した。前もって告げを受けたいと頼んでおいた祈願者が生まれ年で呼び出されて、次から次へオンゴンの前に跪いて、オンゴンが語っている言葉に耳を澄ませた。シャマンはとても疲れた様子を見せて、オンゴンの話しは余り長く続かなかつたが、立ち会っていた人々は「旨く言った。新しいシャマンが滞りなく出来た」と言って喜んだ (Knecht 2010a, 88-91)。

前述したHシャマンの娘の場合とは違って、Bシャマンの儀礼の場合、オンゴンは、その到来を招くために会場に用意された綱の道を利用して、この道の到達点であるシャマンの身体に入り、さらにこの身体を告げの詞を待っている祈願者に話し掛ける道に使うようになった。シャマンにとっては、自分の身体がオンゴンの道になることは生まれ変わりという意味もある。候補者はゲルの中で回ったり、木に付いている巣を初め、父と母の木の間に「オンゴンの道」で往復したりした行為でシャマンに生まれたと見做されている。今後、シャマンは儀礼を行う度ごとにその身体がオンゴンの使う道になる。これは、シャマンではないのに突然オンゴンに襲われた人たちと大きく異なっている事情である。前者はオンゴンの攻撃に対して無力な犠牲者だけであるのに対して、シャマンになった人はオンゴンと継続する繋がりを持っているので、そのお陰で原則として必要な時に何時でも道として自分の身体を提供し、オンゴンを招くことができるようになっている。けれども、例外もあり得る。2003年の夏にD女性の成巫儀礼が終わって、参列した人たちが儀礼後の食事の席に着いていた時のことである。酒が回っていて、皆が歌を披露しているところで、泥酔した若い男が新しいシャマンを含めて、何人かの客を激しくののしり出した。その時、新しいシャマンには突然オンゴンが憑依して、彼女は暴れて倒れた。椅子に腰掛けさせられて、今度は若い男に対して厳しい怒りの言葉を発した。彼女の行為はシャマンの普通の儀礼行為と同じ形を取っていたが、彼女はその時明らかにオンゴンをコントロールし得なかった。しかし、彼女のオンゴンは若い男に対して怒ったので、会場の誰も予測しなかったところで突如その怒りをシャマンになったばかりの女性の身体を道にして表したと会場の人たちはこのハプニングを理解した。

通常の儀礼の場合、シャマンは上記の女性のようにオンゴンの犠牲者にはならないが、憑依によって一時大変激しい場面が起こることがある。儀礼の形には目的によりヴァリエーションが見られるが、基本的に、普通の儀礼が形の上では成巫儀礼によく似ていて、その縮小した形だとも言えるかも知れない。つまり、成巫儀礼で示したように、通常儀礼の時にも「神霊の道」は二通りの形で現れる。こういう儀礼を普通ゲルか家の中で、オンゴンの祭壇の前で行う。祭壇の脇で何かの木、特に入手しやすい柳を立てる。この木は、オンゴンが辿ってくるとされる「シャマンへの道」とも言える「神霊の道」の一形態である。これは神霊の道の重要な一部分であるが、一部に過ぎない。その先にオンゴンが辿る道の終点である、オンゴンを受け入れようとするシャマンが待っている。儀礼用の服を着せてもらってからシャマンは太鼓を手を持って、歌を唱えながら、小さなステップで踊り始める。落ち着いた形で始まったこの動きは急に激しくなり、シャマンは太鼓を強く打ってからそれを捨てて、飛び上がって地面に倒れる。補佐は急いで地面を狂ったように転がっているシャマンを捕まえて椅子に腰掛けさせる。一時苦しく呼吸していたシャマンは次第に落ち着いてきて、今度は太鼓または馬頭つきの2本の棒を手にして、語り始める。狂ったように倒れ、地面を回転するというのは、オンゴンがシャマンに入った印だとされている。その後の語りはシャマンの語りではなく、シャマンの口を借りているオンゴンの語りである。言い換えれば、オンゴンは人々に対して話するためにシャマンの身体全体と口を道として使っている。シ

ヤマンは憑依されている時に何を話したかを知らないと言っている。オンゴンには、人に話しをするために使える道としてはシャマンの身体しかない。話しが終わると、シャマンは立ち上がり、2本の棒を支えにして深くお辞儀したり、あるいは荒々しく戸口へ走って、オンゴンを激しい仕草で送り返す。

成巫儀礼で初めて憑依され、オンゴンの道になることの経験をシャマンは、簡略式でありながら、儀礼を行う度に繰り返す。いずれの場合にも、神霊、つまりオンゴンの道は二通りの形を見せている。一つ目はオンゴンを導入させるために用意された綱や木などである。これらの物は「シャマンへの道」と呼んでもよかるう。けれどももう一つの形、しかもより重要な形では、オンゴンがシャマンの身体を道として利用している。ここで、儀礼の頂点として、シャマンは身体に神霊を迎え、その語りの場として口を提供することによって神霊が人々に接触できる道の機能を果たす。

最後に観点を少し変えてみると、シャマンの身体がオンゴンの道である特色がもう一つ別な面で見えてくる。比較的最近の現象のようだが、シャマンは民間治療師、つまり *bariyaqi* のためにもイニシエーション儀礼を執行することがある。この儀礼の必要性を否定する *bariyaqi* は少なくないが、S シャマンの好意で彼女が指揮したこの儀礼を数回観察する機会を得た。儀礼を行う予定の会場に着いたら、そこで用意されていた物がシャマンの成巫儀礼の会場で見た物によく似ていることに驚かされた。梢が天上の穴を貫くように真ん中に白樺が立てられたゲルが用意されていた。この木の幹には、シャマンの儀礼とよく似ているように小麦粉などで作られた巣が結び付けられていた。ゲルの入り口から南西の方へ、2本だけではなく、9本の白樺の木が数メートルの間隔で一列に立てられていた。列の遠い方の端の木から、他の木の梢を通して、色のついた三本の糸が張られ、ゲルの中の木の巣まで通されていた。儀礼が始まって間もなくいつもと同様にオンゴンがシャマンに入って、彼女は倒れて激しく回転した。持ち上げられて、椅子に腰掛けてからオンゴンが話し始めた。今回は主に *bariyaqi* になる女性はオンゴンの発言の対象であり、大変長く話し掛けられた。その後、夫と家族の何人かも呼ばれた。オンゴンがシャマンから離れた後に、ゲルの木の根元に白いシートが敷かれた。*Bariyaqi* は木を背後に顔をゲルの入り口に向けて、シートの上に腰掛けた。肩から上半身を被せるように白い布を掛けてもらった。この準備が整った時、シャマンは再び太鼓を打ちながら歌を唱え始めた。そうすると、*bariyaqi* はすぐ立ち上がって、走って戸口から外へ飛び出した。そこで、彼女は9本の白樺の間を縫うような形で木の列の端まで走って、また走って帰ってきた。この走りを数回済ませてからすっかり疲れて、ゲルの方に立って、太鼓を鳴らしながら彼女を見守っていたシャマンの所へ戻った。これで儀礼が終了した (Knecht 2010a, 91-93)。

ここも、オンゴンは木に張られた糸を道にして到来したということであった。そして、*bariyaqi* の候補者はシャマンの候補者と同様に巣の付いている木の元において、そこから外へ飛び出した。外の木に張られた紐に登ることはなかったが、代わりに何回も繰り返しその下を走り通った。オンゴンはシャマンの儀礼の時と同様に「シャマンへの道」を辿り、シャマンの身体を道にして *bariyaqi* 候補者に対して話したが、*bariyaqi* に入ることはなかった。しかし、*bariyaqi* が被せた布と彼女が外で「オンゴンの道」である紐の下を繰り返し走り潜ったことはこれからオンゴンの保護を受けながら仕事ができることを象徴しているとS シャマンは説明した。つまり、*bariyaqi* はシャマンのように身体をオンゴンの道としては提供しない。シャマンは代わって道になる。しかし、*bariyaqi* はオンゴンが使う道に接触することを通してオンゴンの保護を受ける。

以上のように見えてくると、シャマンのもっとも大事な役割はオンゴン、すなわち神霊が滞りなく社会の人々に接触できるように自分の身体を道として提供することである。そういう役割を果たす人がいなければ、オンゴンは突然人を襲うことがあってもその人の身体を道にして祈願者に接することはない。

参考文献

- Erdemtu (葉尔達) 2004 「成巫過程」クネヒト, ペトロ編『中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究』(研究成果報告書), pp. 81-83. 名古屋市、南山大学人文学部(人類学研究所)。
- Knecht, Peter (クネヒト, ペトロ) 2004 「中国東北部のシャーマンについて」クネヒト, ペトロ編『中国東北部におけるアルタイ語族の諸民族のシャーマニズムと社会に関する人類学研究』(研究成果報告書), pp. 84-95. 名古屋市、南山大学人文学部(人類学研究所)。
- Knecht, Peter 2010a Initiation rituals of shamans and folk healers in Hulunbeir, Inner Mongolia: Similarities and dissimilarities. *Shaman* 18, pp. 87-98.
- Knecht, Peter 2010b “Wu saman” shi dai de saman. Dimulati Aomaier, *Wu man shidai de saman*, pp. 19-23. Beijing : Minzu shuban she. (中国語訳)